

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第150号

草創期の
柿生中学校 - 13

草創期の苦心談

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆先生方の回想◆

創立時の柿生中学校は、1,2年生 182名に先生 8名でのスタートでした。自前の校舎もなく、小学校から4教室を借用してのスタートでした。校地の選定や校舎建築の苦心談については、第2回と第4回に記しましたが、PTAや校舎建築委員会、そして青年団や地元の人たちの熱心な協力によって、実現したものでした。

事実はその通りなのですが、先生方とりわけ学校の代表である校長先生の苦心もまた大きかったです。初代の柿中の校長で、僅か1年半で静岡県へ出向するために退任された匂坂孝一郎先生は、ナイナイ尽くしの環境の中、目立たないけれどもなさねばならぬ仕事を黙々とこなす、縁の下の力持ちとも言うべき仕事をなさった方でした。

市街地の学校では、栄養失調や栄養不良の生徒が目立つからと、柿中生徒の栄養調査を生徒の弁当調査という形で実施し、弁当不持参の生徒は1人もいなかったこと、弁当の中身は先生方の弁当よりもずっと良いものだった事を確かめ、農村地帯の食糧事情は、都会よりも良いことを確認されました。また、狭い運動場のため、放課後の野球練習では、ボールが耕地を飛び越えて近所の方の畑に飛び込み、球拾いの生徒たちが畑を踏み荒らして困ると、きつい苦情とお叱りをうけて、ひたすらお詫びに徹せられたこともあったそうです。今と違って、高さのある防球ネットなど設置できるはずもなかったのです。消耗品や機材も不足していますから、教材を印刷して配る用紙まで足りなくなり、かといって小学校から借りてばかりもいられず、速やかにPTA組織を作りたいと、父兄会(今では父母会ですが、男女平等と言われても当時はなお父兄会が一般的でした)を開いて趣旨説明をしたところ、「子どものためにもなるのだから」と、母親たちがすんなり賛成してくれ安堵なさったそうです。極め付きは、校舎建設予定地の山林内に、地主さん宅の先祖代々の墓があり、墓の移転をお願いしなければならなくなり、何度か墓参りをして、「ご先祖にもお願いして参りました」と地主さんを口説いて、やっと承諾戴けたと、語っておられます。鈴木太郎建設委員長と共に大変なご苦心をされたのです。それだけに自前の校舎の落成を見ずに転任されたことは、心残りだったことでしょう。

後任の小島喜芳校長は1953(昭和28)年3月まで、4年半の任期中は、自前の校舎は完成しましたが、増え続ける生徒たち全員を収容することが出来なため、旧青年学校の校舎や公民館などを臨時の教室に借用したり、必要な備品や消耗品を確保することに全力をあげました。PTAがピアノを寄贈してくれましたが、家庭科の橘川操先生を陣頭に立てて、家庭科の研究授業発表会を行い、調理室がないため校舎間の渡り廊下を使って、豆腐作りを見事に成功させ、県や市のお偉方から生徒と共に激賞され、次年度予算で買える物品が増えて、大喜びしたこともあったそうです。当時新聞各紙の取材を受け、一躍有名になった地元の事業に農繁期託児所があるのですが、農繁期休暇を利用して非農家の女生徒たちが、保育実習の一貫として託児所の手伝いをして大いに喜ばれたり、学校と地域の絆を強めることにも貢献されました。

3代校長の磯岡先生については、前号で記しました。開校から1955(昭和30)年3月までの9年間、教頭として3代の校長と共に、新制の柿生中学校が次第に学校としての姿を整えていく過程を見つめ続けられた丸山一先生は、生徒指導に大変熱心で、生徒たちから届いた数枚の年賀状を素材として、中学生らしい年賀状の書き方について、参考例をあげながら、生徒会誌『うれ柿』の第2号に、一文を寄せていら



初代校長
匂坂孝一郎先生
(S22.4~23.9)



初代教頭
丸山一先生



2代校長
小島喜芳先生
(S23.10~28.3)



家庭科の研究授業風景(S26.1月)

つしゃいます。

(続)

鶴見川流域の中世
その10

高名の馬飼 都筑経家とその一族

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橘樹研究会会員)

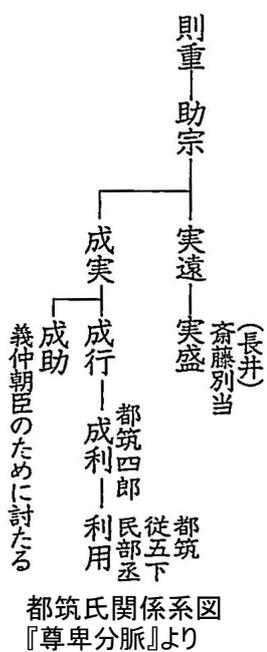
源頼朝の御家人に都筑郡の郡名を苗字とした都筑平太経家という武士がいた。経家は高名の馬乗・馬飼であったが、平家家人として源頼朝に敵対したために、囚人として梶原景時に預けられていた。ある時、陸奥より背丈が大きく猛々しい荒馬が頼朝のもとに届けられた。頼朝は乗馬の達者な御家人たちに命じて試したが、誰一人として荒馬を乗りこなせる者はいなかった。頼朝の口惜しい気持ちを察した梶原景時は「坂東八カ国でこの荒馬を御せる武士はおりませんが、私が預かっている都筑経家ならば必ず乗りこなせると思います」と経家を推挙した。経家は頼朝の御前で荒馬を見事に乗りこなして罪を許されて、既別当に任命された。これは『古今著聞集』に登場する都筑経家の逸話である。



「調馬図巻」 埼玉県立博物館図録『武威武士』より転載

丘陵と谷戸の発達した都筑郡は馬牧の適地であり、立野郷に由来する立野牧は横浜市都筑区川和・佐江戸・池辺から緑区にかけての地域に比定される。立野牧は天皇の勅旨によって特別に上納が規定された勅旨牧で、貢馬の記録は10世紀から11世紀初頭まで確認できる。勅旨牧が衰退した後も牧の経営は都筑経家などの在地勢力に引き継がれたのであろう。

都筑氏に関してはこの他に『源平盛衰記』小坪合戦の事には畠山重忠の郎等である綴(つづき)太郎が見え、『平家物語』巻第九坂落には都筑党が記されているが都筑経家との関係は判然としない。都筑氏はどの武士団の出身であろうか。これまでの研究では小野姓横山党と利仁流藤原氏があげられる。『吾妻鏡』には都筑経家は出てこないが、その代わりに都筑経景が登場する。経家と経景は「経」の字が共通であることから一族であろう。小野氏系図横山(『群書類従』巻第166)に続(つづき)氏があり、これを根拠に都筑経景を由比牧・小野牧に関わった小野姓横山党とする説が有力視されている。しかし、『吾妻鏡』を読むと都筑氏には別の一面があることに気づかされる。



『吾妻鏡』には都筑右衛門尉経景・都筑左近将監・都筑九郎が登場する。都筑左近将監は暦仁元年(1238)2月17日に將軍藤原頼経上洛の先陣随兵として8番目に都筑経景と共に隊列を組んでいることから近親者であろう。都筑九郎は建長四年(1251)に記されているが、名前や年代から推測すると経景の子息であろう。ここで注目したいのは都筑経景である。経景は『吾妻鏡』には九郎経景・右衛門尉経景と称し、將軍藤原頼経の和歌会に和歌の上手な近臣として幾度も登場している。経景の記事からは京都の風雅な文化に馴染む武者の姿が浮かび上がってくる。建長2年(1250)には都筑右衛門跡とあるので、これ以前に死去したものである。さて、「高名の馬乗・馬飼」と「風雅な和歌の上手」という異なる面を備えた都筑氏を、どの様に理解すればよいのだろうか。

建治元年(1275)に記された「六条八幡宮造営注文」には鎌倉中御家人として都筑民部大夫跡5貫文、都筑右衛門尉跡5貫文、都筑左衛門入道3貫文がある。都筑右衛門尉跡は経景をさすと考えられる。都筑民部大夫跡は誰であろうか。民部丞は六位の人をもって任じたのであるが、その中で重なるものを選んで五位に叙し、それを民部大夫という。都筑民部大夫はこれに該当する。老齢を隠すために白髪を黒く染めて奮戦した斎藤実盛の同族に都筑利用があり、この注記に従五位下民部丞とある(『尊卑分脈』)。都筑利用は都筑民部大夫と同一人物ではないだろうか。実盛は長井斎藤別当実盛と称し武蔵国長井庄(埼玉県熊谷市妻沼)の別当であった(『平家物語』)。別当は馬牧の管理者の職名で、立野牧に関係した都筑経家と同様である。越前国の人であった斎藤実盛が長井庄に入部したのは平家の指示であったが、都筑氏も平家の関係で都筑を所領としたのであろう(『図説都筑の歴史』)。「高名の馬乗・馬飼」と「風雅な和歌の上手」という都筑氏の二つの側面を矛盾なく考えると小野姓横山党ではなく、利仁流藤原氏の出身と考えた方が無理のないように思われる。

(つづく)

シリーズ
教育の歩み 第3部

日本の学校と教育(6)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

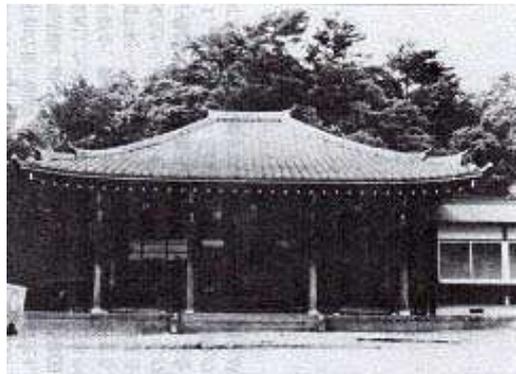
◆「学制の公布」と初等学校◆

幕末の動乱を経て誕生した明治政府は、欧米列強の脅威を背景に、様々な分野でヨーロッパ文明の導入(これを欧化主義と呼びました)を目指しました。洋装の導入、帯刀の禁止、鬻の廃止など、眼に見える身だしなみの変化から、機械製工場の導入や鉄道の建設。さらには国民皆兵原則の導入による軍事制度の刷新から、郵便事業の導入と、矢継ぎ早に新制度の導入が続けられました。太陰暦から太陽暦への変更もその一つでした。こうした新制度の導入の一つに教育制度の改編がありました。明治5(1872)年の「学制の公布」と、明治12(1879)年の「教育令」がそれにあたります。明治政府は誕生早々に、欧州の教育制度の導入を目指し、初等教育から高等教育まで網羅した「学制」を公布したのです。

そこでは、全国を八つの大区にわけ(大学区ともいう)、夫々に大学校を1校設けること、さらに各大区に32の中区(中学区ともいう)を設け、各中區に1校の中学校、全体で256校の中学校を設置すること、そして各中学区を210の小区(小学区ともいう)にわけ、1大学区に6720校の小学校、全国で53,760校の小学校を設けるよう布告したのです。「学制」で構想されたのは、小学校で初等教育を、中学校で中等教育を、そして大学で高等教育を身に着ける三段階の教育制度でした。

そこではまず初等教育について、小学校の修業年限を8年とすること、6歳から9歳までの4年間を下等小学校(後の尋常小学校)とし、10歳から13歳までの4年間を上等小学校(後の高等小学校)とすること、夫々に8級から1級までの8級制を設け、半年ごとに習熟度に応じて進級する仕組みを整える一方、各段階で修得すべき内容まで(現在で言えば教育課程表)網羅した体系的なものでした。

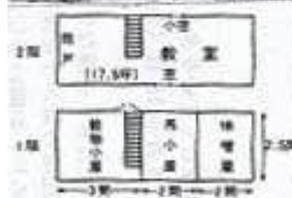
ここで、先ず驚かされるのは、寺子屋教育との連続と断絶の2方向が巧みに組み合わされていたことです。寺子屋では、学習の習熟度によって学ぶべき内容が定められていましたから、学ぶべき内容は年齢に関係なく習熟度別に決められていました。入学時期、入学年齢も親の判断によって、自由に決められていました。それがここでは強制的に6歳になったら学校へと定められたのです。ただ、初期においては、年齢が上の子ども達も初級の8級から始めましたから、当然異年齢の子ども達が混じていたのですが…。また「学制」の布告の別冊は、その第21章で「小学校ハ教育ノ初級ニシテ人民一般必ズ学バズンバアルベカラザルモノトス……」と規定し、さらに第27章にて「尋常小学ヲ分カチテ上下二等トシ、二等ハ男女共必ズ卒業スベキモノトス」とすることで、下等小学校の教育課程は当該年齢の子どもたちが全員学ぶべきものと指定されたのです。これはまさに、後の義務教育化に道を開く志向を、当初から持っていたことの証明です。当時財政の逼迫していた明治政府には、無償の義務教育を実現するための財源はなく、教場の確保も、教員の採用と給与の支払いも地方自治体任せでしたから、小学区に指定された近在の村々で、教場の確保や教員の確保、費用の分担などを、



下麻生学校が産声を上げた不動院

全て行政区の役人をまじえた寄り合いで相談するしかなかったのです。政府もさすがに貧民の子女に対する対応の必要を認め、小学校とは別に貧人小学を設け、授業料その他の経費をすべて免除した無償の学校を特別に設けることとしたのです。ただし費用は全て、当該区の富裕者の寄付によって賄うべしというのですから、何処までも民間頼みの姿勢だったのです。

今シリーズの第2回に記したように、初等学校(小学校)の設置は驚くほどの速さで進みました。この急速な普及は、幕末から明治初期にかけて多数存在した寺子屋や私塾を師匠もろとも小学校に転用したからです。村人口が決して多いとは言えなかった柿生地域でも、片平学校、黒川支校、下麻生学校、上麻生学校、岡登学校(岡上)と、5校もの下等学校が、明治8年までに誕生しています。寺子屋の寺子たちに加え、勧学奨励によって学校へ通わされるようになった生徒たちも加わった学校は、修広寺、東林寺、不動院など寺院を拝借して出発したのですが、いたずら盛り子ども達による寺の器物の損壊が激しく、下麻生学校などは不動院を追い出され、王禅寺の現久保倉哲男氏宅の物置小屋の2階に間借りして、一時期を過ごすなど、苦難の道を歩んだことも記録されています。(続く)



久保倉哲男氏宅の物置小屋の2階に間借り

日本の民間信仰 1

正月について

琴平神社宮司 志村幸男

様々な行事の中で、大切にされている「正月」について書き記しました。

暦の上で一年の始まりが正月(一月)です。どうして一月なのか、暦をもとに説明いたします。

季節の節目は、洋の東西を問わず太陽の「盛り」、「衰え」に対し敏感です。季節の節目として節気は、冬至と夏至、春分と秋分、共に知悉していました。これにしたがい一年を四等分する、そしてこれを二分すると中間点が立春などの四大節気となり四気の節目が生まれます。それを細分割すると二十四節気を得られます。西洋に二十四節気はありませんが、冬至、夏至、春分、秋分そして立春などの四大節気の内容は共通です。古代ローマでは、立春を一年の始まりとしました。太陽が最も衰える冬至の次の季節の節目、太陽が復活する時を一年の始めとし、すなわち立春が正月で一月の意味なのです。太陽暦の正月では、冬であるのに、挨拶に「新春のお慶びを申し上げます」と言います。それは、旧暦の正月(立春)の月だからです。立春の前日を「節分」、そして冬と春とを分ける春分となります。つまり「正月」を迎える前日「大晦日」は、節分の意味があるのです。



元日の日の出

正月はまた太陽巡りの始まりで、太陽信仰の深さを示すものに、日本神話の主神である天照大神が太陽神であるのもその故なのです。日本書紀・古事記の「天の岩戸神話」は、日食説もありますが、これも冬至から立春へのお話で、正月の神話なのです。

洋の東西を問わず、一年の始まりは冬から春に向う太陽が徐々に光を増し木々が芽吹き始める月なのです。

古来より日本の一年の始まり正月は、年神様を迎えて旧年の豊作と平穏を感謝し、併せて今年の豊穰と平和を祈念する日です。その日は、旧暦の正月一月十五日でしたが、明治六年より新暦の一月一日に変わり祝うようになり現在に至っています。

正月元旦は、元は「はじめ」の意、旦は「日の出」、朝を意味し、「年」・「月」・「日」のはじめを三元といい、三元の日の朝が元旦になります。「明けましておめでとう」は、人間に対して言う挨拶だけでなく、新しい年を迎えられた年神様を讃える言葉でもあるのです。

正月を迎える前の月、十二月「師走」は、その語源についていくつかの説があります。一説では、十二月は一年の終わりで皆忙しく、師匠といえども趨走(すうそう)(忙しく走る意)するといひ、「師趨」が師走になったとか。また師走の「師」は法師の意で十二月は僧を迎えて経を読ませる習わしがあり、師がはせ走る「師馳(しはせ)月(つき)」が師走になったとか。またこの月は、新年に新たに祀る、お祓いを済ませた伊勢神宮の「神札(おふだ)」を全国各地に配る「神札配り」の月で、その役目は「御師(おんし)」が行っていました。その御師が忙しく走り配っていた事から、師が走る月「師走」となったとか、色々な説があります。因みに三つ目の説の、お祓い済みの神札が配り終わり空になって要らなくなった箱を「お祓い箱」といひ、用を終えた意となって伝わっています。現在「神札配り」は、神職や総代役員の役目となり、各氏子宅へお配りしています。

来年令和三年は「丑(うし)」年、牛は天神様のお使いという俗信もありますが、古来、疫病を治す神と信じられてきました。また会津地方に疱瘡(天然痘)が流行った時があり、かかった子供の側に「赤べこ」を置いたところ、たちまち全快したという伝えがあり、今では観光みやげとしても広く親しまれています。来年の干支に肖り、新型コロナウイルスが終息して良き年となりますようお願いいたします。

参考資料 現代こよみ辞典 柏書房

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

11月 8・15・22日(毎日曜日)

12月 5・12・19日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (11月29日、12月26日は休館です)